

異文化体験学習プログラム「FIRST in Kyushu」実践報告

－教室外での日本語実践と多文化協同学習を通しての学び－

秦 喜美恵

アブストラクト

2009年度秋学期より、立命館アジア太平洋大学（以下APU）の国際学生（APUでの外国人留学生の総称）の一回生を対象とした「FIRST(Freshman Intercultural Relations Study Trip)」が開始された。2010年度秋学期に参加した国際学生のほとんどは初級の学生であったが、日本語運用力の伸びには目を見張るものがあった。「FIRST」の3泊4日の実習では、任意に指定された地域まで交通手段をはじめその他の行程も自主的に計画して国際学生だけの小グループごとに辿り着かなければならなかった。また、このような状況の中でリサーチ・トピックに基づいたアンケートも実施しなければならなかった。教室で学んできた日本語に加え、さらに自分たちなりに工夫し状況にあった日本語を駆使しなければならない場面にも遭遇し、苦勞して日本語を話す経験を通してコミュニケーション・スキルが向上したと考えられる。事後の自己評価アンケートおよび振り返りの記述からも、実習を終えた国際学生全員が好奇心を持ち積極的な姿勢で学習に取り組むようになったことが明らかになった。また、グループ協同学習を通して対人関係を構築するうえで必要な態度形成にポジティブな影響があったことも明らかになった。

キーワード：アクティヴ・ラーニング、異文化体験学習、多文化協同学習、コミュニケーション・スキル、日本語実践

はじめに

APUにおけるアクティヴ・ラーニングの一環として2007年春に日本人初年次生向け異文化体験学習プログラム「FIRST(Freshman Intercultural Relations Study Trip)」が開始された。国際学生向け「FIRST」は2009年度秋学期から始まり、今年第二回目の「FIRST」が実施された。「FIRST」は単なる旅行ではなく、ある一定の視点をもってその社会・文化を観察させることにある。事前授業で研究設問を設定し、これを明らかにするためにアンケートやリサーチを行う。日本人学生向け「FIRST」と国際学生向け「FIRST」の共通の目的は、訪問地でのアンケートなどを媒介に現地の人々と触れ合い、異文化体験および協同学習を通して異文化理解を促進し好奇心や積極性を育成することである。また、「FIRST」における言語学習という視点からみると、日本人学生は初めて学んだアジアの言語を片言で駆使しながらアンケートを実施することを通してアジアの言語に関心を持ち学習動機が高まるのに対して、国際学生にとっては授業で修得した日本語を教室外で使用する実践の場であり、日本人とのコミュニケーション・スキル向上の好機となっている。本稿では、まず「FIRST」の概要を述べた上で2010年度秋の国際学生向け「FIRST」プログラムの内容を具体的に示し、次に、プログラム終了後の参加学生の自己評価アンケートおよび自己の振り返りを通して国際学生にどのような成長や気づきがあったのかを明らかにし、「FIRST」プログラムの効果を検証する。

1. 「FIRST」の概要

1.1 実施の意義・目的、派遣国・地域

APUでは開学以来、全学生の約50%上限にアジア太平洋地域をはじめとする世界各国からの国際学生を受け入れており、2010年現在90か国を越える国・地域からの留学生が在籍している。このような多文化環境のキャンパスで学ぶ国内学生に対して、一回生の時からアジア太平洋地域の言語に対する興味を持たせ、その興味を持続して国際学生との交流を通じて学修を続けることを目的として、低回生向け「言語イメージプログラム」が実施されてきたのに加え、2007年春学期より一回生向け「FIRST」プログラムが開始された。これまでに200名以上の学生が「FIRST」に参加している

が、彼らは次の段階の交換留学やフィールドスタディなどの海外プログラムへ進む候補者でもある。APU では学期中のクォーターブレイクを「アクティヴ・ラーニング・ウィーク」に位置づけており、「FIRST」はこの期間中に実施される。これまでの国内学生の派遣先は韓国、台湾、香港である。教員一名と教学部職員が同行する。プログラムの実施に当たっては、事前・事後授業の運営、派遣先への引率を通じての若手職員の研修的な位置づけが明確にされている。

2009年度秋からは国際学生向け「FIRST」がスタートし、大都市ではない九州圏内の地域でフィールド・リサーチなどの実習を行っている¹⁾。2009年秋学期は15名、2010年秋学期には19名の国際学生が参加し、アンケートなどのリサーチ活動を通じて地域住民と積極的に交流した。

1.2 募集人員とTAの役割

学生の募集人員は、10名～20名程度である。また、5名の学生に対して当該国・地域の先輩学生が一名TA¹¹⁾として付く。TAは公募し書類選考で決定される。TAは事前・事後授業で学生をサポートするが、訪問先での実習時のフィールド・リサーチを行うときには、グループから少し離れたところにいるようにし、学生自身に体験させることに徹し基本的には学生を助けない。交通手段やその他の行動は参加学生が自主的に計画し実行する。これにより、参加学生は必然的に現地の人々と接触し異文化学習に付きものの不確実性と不安を経験し、これを乗り越える体験ができるのである。現地でのTA役割は危機管理である。よって学生が道を間違えた場合には、TAも学生と一緒に同じルートを同行することになる。また、現地実習中は、毎日引率者やTAと振り返り討議を行い、その日に得られた観察や個人的な考察を話し合い共有し協同学習を行う。また、TAは一日の終わりに参加学生が書いたその日の活動記録に、コメントを書きその日のうちに返却する。

1.3 科目概要

1.3.1 単位および成績評価

「特殊講義（基礎教育科目）」として2単位取得できる。成績は、合格／不合格で評価される。

1.3.2 2010年度秋学期「FIRST in Kyushu」の実施内容

次に、2010年度秋学期に実施した「FIRST」の実施内容について述べる。

[実施期間と参加者]

プログラム期間：	2010年10月20日（水）～12月1日（水）
実習期間：	2010年11月20日（土）～11月23日（火）（3泊4日）
参加学生：	19名（男5名、女14名） <日本語レベル>初級（15名）、中級（3名）、応用日本語（1名） <出身国・地域>インドネシア（6名）、中国（6名）、ドイツ、アメリカ、タイ、シンガポール、ノルウェー、台湾、日本（英語基準）（各1名）
実施形態：	グループ討議とフィールド・リサーチおよびオリエンテーリング
担当教員：	1名
日本人TA：	4名（男2名；3回生、2回生、女2名；4回生、2回生）

[授業／実習スケジュール]

授業/実習	日時	内容
参加者がイグニス	10月20日（水）4限	オリエンテーション、TA紹介 プログラムにかかわる事務連絡

異文化体験学習プログラム「FIRST in Kyushu」実践報告
 -日本語実践と多文化協同学習を通して得られた効果-

事前授業	1	10月27日(水)6限	グループ分け、アイスブレイキング、調査地の決定 日本語の学習：調査地の宿泊施設を調べて日本語で宿の予約 課題：調査地について調べる
	2、3	11月3日(水)6・7限	各グループの調査地の概観まとめおよびプレゼンテーション、 日本語の学習：プレゼンテーションで日本語を使ってみる 課題：各グループで話し合いリサーチ・トピックを考える
	4、5	11月10日(水)5・6限	各グループのリサーチ・トピックの設定およびプレゼンテーション 日本語の学習：各グループでアンケートを依頼する際の日本語のフレーズを作成 課題：日本語でのアンケート作成
実習	1日目	11月20日(土)	別府出発、オリエンテーション、フィールド・リサーチ
	2日目	11月21日(日)	フィールド・リサーチ、オリエンターリング
	3日目	11月22日(月)	フィールド・リサーチ、オリエンターリング
	4日目	11月23日(火)	フィールド・リサーチ、オリエンターリング 別府着
事後授業	1、2	11月24日(水)5・6限	実習の振り返り討議、プレゼンテーションの準備
	3	12月1日(水)5・6限	プレゼンテーション、アンケート 課題：振り返りレポート

[グループ編成と実習の内容]

実習の目標：

- ① 日本語能力を高めるためにできるだけ多くの日本人と話をする。目標 100 人。
- ② リサーチ・クエスチョンに基づいてアンケート調査を実施し、日本について理解を深める。
- ③ グループワークを通してお互いに学ぶことができるようになる。
- ④ 自分たちだけの力でフィールド・リサーチを実施する。

グループ編成および調査地とリサーチ・トピック：

参加学生 19 名の国・地域、日本語レベルおよび男女比を考慮した上で、日本語初級レベルが 3 グループ、中級以上レベルが 1 グループの 4 グループを編成した。調査地は、あらかじめ教育学部副部長および担当職員と教員とで決めておき、各グループはくじ引きで調査地を決定した。4 グループの参加者および調査地、リサーチ・トピックは次の表の通りである。

表1 グループ編成および調査地とリサーチ・トピック

グループ	参加者の出身地	調査地	リサーチ・トピック ⁱⁱⁱ
① 5名	タイ1、中国2、インドネシア1、日本 ^{iv} 1	大牟田／佐世保／福岡	「欧米文化に影響されている地域の住民(佐世保)は影響されていない住民(大牟田)より、外国人に親切だ」
② 5名	ノルウェー1、シンガポール1、中国1、インドネシア2	飯塚／有田／福岡	「働いている高齢者と退職した高齢者とはどちらがもっと満足しましたか？」

③ 5名	ドイツ1、中国2、インドネシア2	唐津／諫早／福岡	「唐津と諫早～コミュニケーションの電子化が進んでいるのはどっちだ!？」
④ 4名	アメリカ1、中国1、インドネシア2	久留米／伊万里／福岡	「都市の観光～久留米と伊万里の比較～」

宿泊先の予約：

事前授業で各グループの調査地での宿泊施設のリストを作成し、宿泊施設に電話し日本語で情報収集する。グループで内容を比較検討し、宿を決定した後予約する。

毎日の振り返りミーティングとログノートの記録：

実習中は、一日の終わりに振り返りミーティングを行う。アンケートの実施状況やグループの問題などを話し合う。このミーティングではTAと教員（実習中一度は参加）も気づいたことをアドバイスしたり、励ましたりする。できるだけグループメンバーに考えさせるようにファシリテートする。その後各自その日の活動記録をログノートに書き、TAはそれに目を通しコメントを書いて返却する。

[プレゼンテーション]

事後授業の最終日に、日本人学生の「FIRST in 韓国」の参加グループと合同プレゼンテーションを実施した。発表時間は1グループ15分と質疑応答5分の20分である。国際学生はすべて日本語で発表した。実習から戻ってきて一週間という限られた時間の中で、アンケートの集計結果と分析などを行い日本語のパワーポイントを作成した。TAは日本語指導を最大限に行った。

また、各グループの発表に関して別府北ロータリークラブの役員6名に各賞の選出と講評をお願いした。そのうちの1グループが後日同クラブの例会に招待されプレゼンテーションを行った。

2. 自己評価アンケートおよび振り返りレポートの結果と分析

「FIRST」プログラム終了後、参加学生に自己評価アンケート（4段階評価）を実施した。質問項目は、33項目が大学生活に取り組む態度、および学修のためのソーシャル・スキルや自己管理などに関するもので、16項目が社会人基礎力に関する項目である。また記述式の振り返りとして、「FIRST」に参加する前と後では「自分自身何がか変わったか」および「何を学んだか」について箇条書きで書かせた。さらに、「一番学んだことをこれからの大学生活でどのように活かしてゆこうと考えるか」について800語程度の振り返りレポートを課題にした。

2.1 自己評価アンケート結果

2.1.1 「大学生活における態度形成について」

1) 「表2」には19名全員が「強くそう思う」、「そう思う」と答えた項目を示した。

表2 100%の参加者が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目

① 好奇心を持つようになった
② 対人関係能力が伸びた
③ 異文化の友達が増えた
④ 他人の意見に耳を傾けることができるようになった
⑤ 学習意欲がわいた
⑥ 相手の立場を考えられるようになった
⑦ 人との繋がりが大切だと思えるようになった

①と⑤からモチベーションが高まったことが分かった。②③④⑥はソーシャル・スキルに関する項目であり、対人

関係を構築する上で必要な態度形成に影響があったといえる。上記以外の項目では「そう思わない」と回答した学生もいる中で、上記の項目では全員が「そう思う」あるいは「強くそう思う」と回答していることから、「人間関係の構築にかかわる姿勢」と「前向きな姿勢」が「FIRST」を通して身に付いたこととして、学生が強く認識していることが分かった。

2) 「表3」には19名中17名(89%)以上が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目を示した。

表3 88%が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① いろいろなことを相談できる先輩ができた② 何でも話せる友達ができた③ グループ・ディスカッションに活発に参加できるようになった④ 異文化共同学習の方法が身についた⑤ APUの学生であることに誇りを持つようになった⑥ APUの一員としての意識が芽生えた⑦ APUに入学してよかった⑧ やる気がでてきた⑨ 文化・宗教などの違いを受け入れられるようになった⑩ 大学生活で壁にぶつかっても、それを乗り越えていく自信がついた⑪ チームワークができるようになった |
|---|

ほとんどの学生が、「APUへの帰属意識」を高め、APUの特色である「異文化環境における違いを受け入れる態度」や「困難を乗り越える自信」が持てるようになり、「グループでの共同学習に取り組む意欲」が高まったといえる。

3) 「表4」には42%～16%が「そうは思わない」あるいは「全くそうは思わない」と答えた項目を示した。

表4 42%～16%が「そうは思わない」あるいは「全くそうは思わない」と答えた項目

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 時間管理能力が伸びた② 将来の目標が明確になった③ 将来の目標を達成するために大学4年間で何をすべきか明確になった④ 勉強と課外活動・アルバイトのバランスがとれるようになった⑤ 大学での勉強の仕方が理解できた⑥ きちんとスケジュール・計画を立てて、そのスケジュールに沿って行動することができるようになった⑦ しなければいけないことに優先順位をつけるようになった⑧ 規則正しい生活ができるようになった⑨ 時間を有効に使えるようになった⑩ 今までの自分の殻を破った⑪ 課外活動を始めた⑫ 大学生活に対する不安が解消された⑬ 自己理解ができるようになった⑭ 振り返りの大切さが理解できた⑮ ファシリテーション能力が上がった |
|--|

中でも、「将来の目標が明確になった (6名 32%)」、「しなければいけないことに優先順位をつけるようになった (6名 32%)」、「規則正しい生活ができるようになった (5名 26%)」、「大学生活に対する不安が解消された (8名 42%)」など中・長期的な目標設定や、時間をかけて習慣化し身につけなければならない自己管理に関する項目に「そうは思わない」あるいは「全くそうは思わない」という回答率が高かった。

2.1.2 「社会人基礎力について」

1) 「表5」は19名全員 (100%) が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目である。

表5 100%が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目

① 向上心が高まった
② 物事に対して意欲的に取り組むことができるようになった
③ 情報収集力が上がった
④ 語学力が上がった

全員が物事に取り組む態度 (向上心や意欲) と、スキル (情報収集力と語学力) の両面が伸びたと強く認識しているといえる。

2) 「表6」は、17名 (89%) が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目である。

表6 89%が「強くそう思う」あるいは「そう思う」と答えた項目

① 創造力がアップした
② 問題発見力および解決力がアップした
③ コミュニケーション能力が上がった
④ 責任感を持てるようになった
⑤ 行動力/実行力がアップした
⑥ 自分を振り返り自己評価ができるようになった

価値や認識面での自己評価の高さは、行動面の自己評価の高さに関連している。

3) 社会人基礎力の中で「そうは思わない」あるいは「全くそうは思わない」という回答が高かった項目

社会人基礎力の質問の中で「そうは思わない」あるいは「全くそうは思わない」という回答が高かったのは、「リーダーシップを発揮できるようになった (4名 22%)」、「粘り強く取り組む力がついた (7名 37%)」、「自分が好きになった (3名 17%)」、「人前で話すことが苦手でなくなった (4名 22%)」、「プレゼンテーション能力が上がった (3名 17%)」、「ストレスコントロールができるようになった (5名 28%)」の項目であった。

2.1.3 その他の質問について

1) 「日本語力がアップしたかどうか」についての質問には、全員 (100%) がアップしたと回答した。どんな点が伸びたかについては、「日本語を話すのが恥ずかしくなくなり、自信がついた」、「聞き取る力がアップした」、「日常会話ができるようになった」、「語彙力がついた」などが挙げられた。

2) 「4日間で何人の日本人と話したか」については、「71~80人 (3名 16%)」、「61~70人 (6名 32%)」、「41~50人 (7名 37%)」、「31~40人 (2名 10%)」、「21~30人 (1名 5%)」であった。

3) 「FIRSTを次の一回生にどの程度進めたいか」という質問に対して、「強く薦めたい (12名 63%)」、「薦めたい (7名 37%)」であり全員が後輩に薦めたいと思っていることが分かった。

2.2 振り返りレポートから

「FIRST」の体験を通して「参加する前と後ではどう変わったか」、また、「学んだことで一番大切だと思うことは何か」、そして「それを今後どのように活かしたいと思うか」について振り返りレポートを書いてもらった。

1) 「グループワークを通して学んだこと」についての振り返り

多くの学生がグループメンバーからリーダーシップのとり方や物の考え方の違いを学んだ。APUは多文化環境であるが、「FIRST」を体験した後お互いの考え方や文化の違いを受け入れられるようになった。また、異文化のグループで協力してリサーチを行うことができたことからお互いを近く感じまた尊敬もしている。自分の苦手な部分を他のグループメンバーがどのようにうまくやっているかを見て、自分も努力することができたことで、自分に自信がついた。グループの他のメンバーの頑張りをみて自分ももっと頑張れるようになった。毎日自分のアンケートの到達目標を決めていたが、何度も断られてなかなか達成できないこともあった。しかし、グループのみんなが励ましてくれたので、最後まであきらめずにやり遂げることができた。一日の終わりにグループミーティングをしたが、その時にはアンケートの方法などでいろいろな問題が挙げられた。

グループ内での協同学習の成果として、物事に取り組む意欲的な態度ややる気が芽生え、お互いが学び合うことによりグループの高いモチベーションが維持されたといえる。また、ある学生は一人でやる時と比較してグループワークでやるメリットについて次のような気づきを挙げている。

自分は一人で何かをする方が得意であるが、「FIRST」を通してグループで協力して皆の意見を出し合い議論して出された結論がよりよいものであることを学んだ。一人の場合は自分の弱点がカバーされないが、グループで話し合うとそれぞれの弱点が補われるのである。このことを通して自分は妥協することができるようになった。また、グループで一緒に頑張れたのはグループメンバーとの信頼関係が構築されたからである

あるグループの一番の問題は言葉であったことを振り返り、結果的に言葉の壁を乗り越えるプロセスがグループの連帯感を強めたと述べている。

英語が母語でないメンバーが英語を使うため最初の頃よくお互いが理解できておらず、そのためグループの結束も弱かった。何度もぶつかり話し合うことを通して、お互いの言いたいことをよく聞いて理解することがいかに大切であるかということ学んだ。お互いの言いたいことを聞くことでグループの連帯感が強まった。この経験を活かして、大学の授業でのグループワークの時にはもっと積極的に、そして自分の心を開くようにしたい。日本語クラスの中で学んだことを実際の現場で応用することができた「FIRST」の経験は大変貴重であった。

グループで壁を乗り越えた経験を通して、問題へ取り組む姿勢を学ぶことができ、今後の大学生活の場面でいろいろな問題にぶつかっても、「FIRST」の経験を活かしてゆくことができるという趣旨の振り返りである。

2) 「実習中の日本人へのアンケート依頼の経験を通して」の振り返り

訪問先の現地の日本人にアンケートを実施した経験を通して気づいたことや学んだ点は、次の通りである。

最初はアンケートを断られると気持ちが落ち込んだが、何度も断られる中でアンケートに答えてくれる日本人に心から感謝をする気持ちが芽生え、その後からは断られても「有難うございました」といえるようになった。アンケートに協力してくれる人々に感謝の気持ちを持つことができた。アンケートを通して日本人に話すとき、日本語でより丁寧に接する方法が身に付いた。特に年配の方々

と話すときに彼らの人生のエピソードを聞くことができたことは貴重な経験であった。これをきっかけにもっと日本と日本人のことを知りたいと思った。プログラムを終えてから、自分は人が何か助けを求めてきたら喜んで手伝いたいと思うようになり、できるだけの手助けがしたいと思うようになった。また、嫌なことがあっても異なる視点から考えてあまり落ちこまなくなった。アンケートは、ただの紙ではなくアンケートを通して人の心に触れることができ感動できた。断られても笑顔で対応できるようになった。また、アンケートを通して人々が感じていることや気持ちを察することができるようになった。また、アンケートを通して自分の日本語が十分ではないことを痛感し、もっと日本語を勉強しようというモチベーションが高まった。アンケートを断られてもそれが普通だと思うことで、強くなれた。これからの人生でもいろいろ断られることがあると思うが、その時にもあきらめないで強くなりたいと思った。

アンケートの実践を通して、アンケートに答えてくれる日本人への感謝の気持ちを持つようになったり、一日本人の人生のエピソードに触れて感動したりして同じ人間として理解できるようになったといえよう。道を教えてもらったりアンケートに答えてもらったりして自分が手助けしてもらった中で人の手助けをする価値に気づくことができたのである。その経験が他の日本人のみならず人に接するときにも良い影響を与え、より積極的に人と交流する意識が芽生えたといえる。

3) 「FIRST 全体を通して」の振り返り

「FIRST」全体を通しての振り返りは、主に「リサーチのプロセスについての学び」、および「関係構築の大切さへの気づき」、「日本語の理解力および運用力の向上」、「時間管理と目標設定の大切さへの気づき」の4つに分類できる。

リサーチのプロセスについての学び：

グループで行う調査をどのように運営すればよいのかを学ぶことができた。リサーチ・クエスチョンの設定の仕方や、アンケートの構成などについて学ぶことができ、次のリサーチに活かして行きたい。プロジェクトをやり遂げるためには、大変なことを乗り越えなければならないが、最後に頑張って得られた結果にとっても満足することができたことは貴重な体験であった

関係構築の大切さへの気づき：

アンケートのためだけに日本人と話すのではなく、アンケートの後でいろいろな話をする経験が貴重であった。日本語で20～30分ぐらい話すことができるようになり、関係を育むともっといろいろな話ができるということが分かった。

日本語の理解力および運用力の向上：

以前よりもっと積極的に日本語を話すようになった。ワークショップやサークルなどでもできるだけ日本語を話すようにしている。また、たったの4日間であったが、「FIRST」に行ってから、日本語で何を言っているかよく聞き取れるようになっていた。

時間管理と目標設定の大切さへの気づき：

フィールド・リサーチを通して時間管理を学んだ。限られた時間の中で多くのことを決め実施しなけ

ればならなかったので、すべてはやれなかったけれどもどのように取り組めばよいか分かった。プログラムを通して自分は熱意をもって取り組めるようになった。すぐにあきらめないようになった。なぜなら、やり遂げるためには簡単な道はないということを理解したからである。

「FIRST」でのリサーチを実際に行うための手法と、アンケートを通して築くことができる関係性によって日本語でのコミュニケーションがよりしやすくなることに気づいている。この気づきによって日本語を話すことに自信を持ち今後はより積極的日本語を話すと思われる。

2.4 TAについて

振り返りの中で、TAへの感謝が述べられていた。最初は、あまり手伝ってくれないと不満に思っていたが、終わってみると、TAが手伝わず見守ってくれたから、自分たちが思ったようにいろいろ試すことができた気づいた。TAは、実習中は見守る立場であるが、事前授業やアンケートの作成の際に多大なサポートを惜しまなかった。また、事後授業やプレゼンの準備のミーティングにも参加してアドバイスをしてくれたことに感謝している。TAは参加学生に安心感とやる気を起こさせ、最後のプレゼンテーションの発表まで到達させることができた。必要以上に手助けせず見守るTAの存在意義は「FIRST」にとって大きいといえる。

2.5 「実習」の目標達成についての評価

以上の振り返りの内容は、「FIRST」の事後アンケートで参加学生全員が「そう思う」、「強くそう思う」と答えた11項目（「好奇心を持つようになった」、「対人関係能力が伸びた」、「異文化の友達が増えた」、「他人の意見に耳を傾けることができるようになった」、「学習意欲がわいた」、「相手の立場を考えられるようになった」、「人との繋がりが大切だと思えるようになった」、「向上心が高まった」、「物事に対して意欲的に取り組むことができるようになった」、「情報収集力が上がった」、「語学力が上がった」）を裏付けるものであった。

また、実習の目標であった、次の4項目についても、アンケート結果および振り返りの記述から目標は達成されたといえる。

- (ア) 日本語能力を高めるためにできるだけ多くの日本人と話をする。目標100人。
- (イ) リサーチ・クエスチョンに基づいてアンケート調査を実施し、日本について理解を深める。
- (ウ) グループワークでお互い学ぶことができるようになる。
- (エ) 自分たちだけの力でフィールド・リサーチを実施する。

100人の日本人へのインタビューは達成されなかったとはいえ4日間で17名が約50人の日本人にアンケートを実施できていることは評価される。断られた数を入れると日本人に話しかけた数はもっと多いと思われる。アンケートの数が少なかった学生の多くから、少なかった理由としてアンケートの質問項目が多かったことと、そのアンケートの内容からいろいろな話に発展して一人30分くらい対話をしたからであるということが報告されている。

「FIRST」プログラムを体験した国際学生の自己評価は全体的に高いことが明らかになった。また、大変な経験をした学生も努力した分だけ結果が得られたことにより、途中で経験した大変なことや困難も、何かを達成するためには乗り越えるべきことであると認識されるようになった点が大変興味深い。アンケートと振り返りレポートの結果から、一回生の成長のための「FIRST」プログラムの意義と効果は大きいといえる。

3. まとめと今後の課題

「FIRST」の4日間の実習期間中、参加学生はみるみる積極的になり強くなってきた。また、日本語運用力の目覚ましい伸びには驚かされた。事前授業でのグループワークによる準備がチーム力を高める土台を作ったが、実際の実習期間中にグループを観察していると、アンケートを通してぶつかった問題や困難をグループで共有し解決策を話し合うプロセスの中でグループの連帯感や信頼感が確実に育まれていると実感できた。また、4日間寝食を共にすることで親密度が増し、お互いが助け合い励まし合えるようになり、ポジティブな雰囲気が維持されグループの結束力が日を追うごとに増してきた。

グループワークについては、何かを通して一緒にやることで、そのプロセスから多くのことが学べるということが明らかになった。目的を共有することで、プロセスの中で遭遇する大変さや困難について、それらを避けるべき問題としてとらえるのではなく、乗り越えるべきものであるという認識をもつようになってきた。物事に向き合う視点に変化して認識が変わり、困難に向き合い取り組む姿勢が生まれてくる。体験を通してグループの目標が明確に共有されていればいるほど困難に向き合ったときの結束力や創意工夫が発揮されていた。どんな時もあきらめないプロセスをグループ全体が体験できるのである。

日本語運用の面では、事前授業ではかたくなに英語しか話さなかった学生も、事後の振り返りの時には当たり前のようには日本語で話し始めた。また、こちらが日本語で声をかけても反応がなかった学生からも、その学生に話しかけていないときでも、その場に居合わせた場合、相槌などの反応が示され日本語の会話場面の輪に入っていることが認められた。

これまで持っていた日本語の知識を「FIRST」の実践の場で思い切り使用したという感がある。もっと言えば「当たって砕ける」の精神で、何とかして日本人と会話をしてアンケートに答えてもらう努力をせざるを得なかったのである。恥ずかしいなどと言っている状況ではなかった。そのような状況の中で、教室では発揮されずにいた自分なりのスタイルを発揮し自分らしいやり方で日本語の運用の仕方を獲得してゆけたのではないかと思われる。何とか頑張れば相手に通じるという体験が、学生の日本語を話すことへの自信につながり積極的になれた要因であったと思われる。教室外での日本語実践としての「FIRST」での体験は効果絶大だといえる。

今後の課題として、初級日本語レベルの学生の日本語運用力が伸びたかどうか、日本語コースと連携して実証したい。また、「FIRST」プログラムを終えた学生が、今後どのような体験を積み重ねて成長してゆくのかについても今後継続的に調査を実施して行きたい。

注

- i 別府北ロータリークラブより参加費の一部をご支援いただいている。
- ii APUでは学部の二回生から四回生のSA（スチューデント・アシスタント）をTAと称している。
- iii 学生が使用した表現のまま採録した。
- iv 国籍は日本であるが、英語基準で入学している。
- v 振り返りは英語で書かれているが、本稿で取り上げた部分については筆者が日本語に訳し採録した。